2023年4月23日 礼拝メッセージ

**聖書：ルカの福音書18章9～14節**
**説教：自分を高くする者、低くする者**

はじめに

前回は、1節の「いつでも祈るべきで、失望してはいけません」のなかの、特に「失望してはいけない」というところに目を留めながら、私たちはどのようなときに失望してしまうのか、そんな私たちにイエスはどのようなことをしてくださったのかを見てまいりました。そのとき結論として、弟子たちもそうだったように、私たちはどんなに祈っても失望してしまうことがあると言いました。そうしますと、祈っても失望してしまうのであれば、祈る意味はあるのか、祈っても無駄ではないのか、そんな疑問が出てくるわけで、それは次回に触れますよと予告しておりました。ということで、今朝は祈りと失望というテーマの続きになり、特に二つのことを取り上げてまいります。一つ目は、私たちは何を祈るのかということ。二つ目は、イエスが「失望してはいけない」と言われたのはどういうことか。この二つの事を考えてまいります。

１　パリサイ人の祈り

１）私はほかの人たちとは違う

一つ目のテーマ、私たちは何を祈るのかから始めますが、ちょうど今日の箇所でイエスは二人の人物を取り上げて祈りについて教えてくださいます。

まずパリサイ人の祈り。11，12節。「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」

パリサイ人はなにを祈っているでしょうか。大きく二つあります。一つ目。「私がほかの人たちのように、なになにでないことを感謝します。」自分とほかの人を比べて、自分は正しくて間違ったことはしていないと言ってます。それでも足りないと思ったのでしょうか、取税人のことをわざわざ取り上げて、「私は取税人のようではないことを感謝する」と祈っています。これが一つ目。

２）私は神に喜ばれることをしている

パリサイ人の祈りの二つ目。「私は断食をしている。私は十分の一を献げている。」

意外なことですが聖書には、断食をするように命じている律法はありません。ただ罪を自覚した人々が自ら進んで断食をしたということは幾つか出てきて、パリサイ人たちはそれに倣って定期的に断食するよう教え、また自分たちもしていた。その事情は十分の一を献げることについても同じで、これも律法にはありません。ただ聖書には、神の恵みに感動して進んで十分の一を献げた信仰者の話しが出てくるので、パリサイ人たちもそれに倣ってそうするよう教えていた。

２　取税人の祈り

１）取税人とは

続いて取税人の祈りを見ます。まず取税人とはどんな人たちであったか、その説明から。当時世界最大の帝国であったローマ帝国は、イスラエルにも入って来て、神殿から多くの財宝を奪い、税金も取り立てます。当然のことですがイスラエル人としてこんな屈辱的なことはありません。ところが、自分たちの同胞から、憎きローマ帝国の手先となって税金を取り立てる者が現れる。それが取税人と呼ばれる人たち。当然嫌われて、仲間づきあいはしない。それでも取税人になるのは、理由は一つで、実入りがいいからです。集めた税金をごまかして自分の懐に入れる。ですから取税人は裕福で立派な家に住んでいる。これでまた人々の反感を買う種になり、取税人は罪人であると言われるようになる。パリサイ人が、「この取税人のようでないことを感謝します」と祈るのはそんな背景があったからです。

２）遠く離れて立つ

そんな取税人はこう祈ります。13節。「一方、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神様、罪人の私をあわれんでください。』」

先ほどのパリサイ人と比べると違いがよくわかります。まず二人の立っている場所です。パリサイ人は宮の前に堂々と進み出て祈っている。ところが取税人は遠く離れて立って、目を天に向けようとしない。自分は神の前に出る資格がないと思っています。胸をたたいて悲しむ。二人の姿は対照的です。

３）罪人の私をあわれんでください

そんな取税人はこう祈る。「神様、罪人の私をあわれんでください。」パリサイ人の祈りと比べましょう。パリサイ人は、自分が正しいことをいささかも疑わず自信満々で、その正しさを表現するのに、自分とほかの人と比べていきます。また、行いについても自分はこれをしてあれをしてと一つ一つ並べ立てて、神の前で自分の正しさを証明しようとしていく。それに比べてこの取税人はどうですか。ほかの人と自分を比べるようなことはしない。ただ自分のことだけしか言いません。また私たちならやりがちなことですが、なるべく自分の罪を小さく見せようとして、いろいろ言い訳をしたりすることもありますが、取税人は言い訳しません。自分がいかに罪人であるかがわかっていて、そのことが迫ってきて、悲しみに暮れている。そんな様子です。自分は「あわれんでもらわなければ、生きることのできない存在である。」そう告白する。

この祈りを聞いて、皆さんはどう思うでしょうか。「困ったときの神頼みですか。自分で蒔いた種なんだから自分で責任をとるべきだ。」そんな反論が聞こえてきそうです。

４）自分を低くする者は

ではイエスはどのように語ったか。14節。「あなたがたに言いますが、義と認められて家に帰ったのは、あのパリサイ人ではなく、この人です。だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるのです。」

初めて聖書の話しを聞く方は、おそらく驚くのではないでしょうか。パリサイ人は立派な宗教家で、口で言うだけではなく率先して神に喜ばれることをしているのだから、当然、パリサイ人が正しいに決まっている。それに比べて、取税人は神に喜ばれるどころか、悪いことをしていたのではないか。それがどうして義とされるのか。それとも、悪いことをすれば救われるということか？

取税人が義とされた理由について、イエスはこう説明しています。パリサイは自分は正しいと確信して、自分を高くした。けれども取税人はその反対に、自分は罪人で神のあわれみがなければ生きていけない者なのだと悲しみ、自分を低くした。自分を低くする者こそが神によって高くされる。これが神の救いの原則である。そう教えました。

３　いつでも祈るべきで、失望してはいけない

１）罪を悲しむ

こう言いますと、すぐに誰かがこんなことを言いそうです。「私たちもこの取税人の祈りをお手本にして、『神さま、罪人の私をあわれんでください。』そんなふうに祈りましょう。」一見、正しいようにも見えますが、大切なことを見落としています。パリサイ人は自分が罪人であるとはまったく思ってもいませんから、悲しむどころか、胸を張って神の前に出ます。ところが取税人は、自分が罪人であることを自覚すればするほど神の前にも出られず、胸をたたいて悲しむ。何を祈るか、どんなことばで祈るかが大切なのではありません。自分の罪をどこまで悲しんでいるのか。神はそこをご覧になる。イエスが「悲しむ者は幸いです」と言われたのはそのことです。

２）「失望」していた取税人

そんな取税人は、神によって義と認められて自分の家に帰ります。この人は救われました。18章1節のみことばを思い越すならば、この人こそ、「いつでも祈るべきで失望してはけない」ということのお手本だったと言うことになります。

でもおかしいと思いませんか。パリサイ人はどうしてたか。祈りを見てもわかるように、彼はまったく失望というところから遠いところにいる。パリサイ人はいつもよく祈っていたので失望しなかった。ところがそのパリサイ人は義とされなかった。取税人はその反対です。「自分は罪人だ」と祈って、心の底から失望した。失望したけれど、義とされた。なにか辻褄が合いません。っこれはどういうことでしょう。18章1節で「失望してはいけない」と言っているけれど、実際は失望しているではないか。

３）やがての日、あなたは失望しない

ここにひとつの落とし穴があります。「失望してはいけない」と言われると、これから先、死ぬまで失望してはいけない。もし失望したならそれは信仰が弱いのだ。そんなふうに頭ごなしに言われたような気になります。でも実際、私たちは日々失望しています。失望しない人はまずいないでしょう。ではイエスはできそうもないことを言ったのか。そうではありません。14節です。「義と認められて家に帰った」とあります。義というのは、あなたは正しい、だからもはや神のさばきにあうことがない。あなたは救われたと言うことです。そうすると、いつ失望しないのか、です。さばきの日です。さばきの日、あなたは絶対に失望することはない。そう言っている。今は小さな失望が続くかも

知れない。でも最後のさばきの日、あなた約束どおり神の国に迎えられる。その日、あなたは絶対に失望しない。あなたは自分の罪を自覚して、いまは失望しているだろう。でも、神はその日、あなたの祈に応えてあなたをあわれみ天の御国に迎えてくださる。

４）自分を低くする

まとめると、私たちがやがての日に失望しないために自分の罪を告白していく。そうやって自分を低くしていく。そのような祈りをしていくことになります。それは大変なことだと思いますか。

でも私たちはどんな生き方をしてきたか。ひとことで言えば、自分を高くする生き方です。子どもは背の高さを競います。それから偏差値で競い、よい学校を出て名誉ある地位に就き、よいところに住み、よい収入を得てと、とにかく高い所を目指す。ないものを手に入れるために一生懸命努力をする。それがこの世の目指す生き方でした。

では自分を低くすることはどうでしょう。一生懸命努力しなければ手に入らないものでしょうか。まったくそんな必要はない。なぜなら、すでに私たち自身が生まれながらに持っているから。誰もが生まれながらに神の前では罪人です。イエスは、私たちにないものを求めているのではない。誰もが全員持っているもの、弱さ、恥、失敗、悲しみ、皆誰もが持っているものをそのまま献げなさいと言って待っておられます。私はダメな人間です。そのよな正直な祈りを待っておられる。そんな祈りに対して神は約束してくださる。あなたは絶対に失望することはない。

神の約束を信じて歩んでまいります。